

# WAKAYAMA NORTH ROTARY CLUB



2026 年 2 月 16 日 第 2020 例会 VOL.48 No.23 通算 2024 号

2025-2026 年度  
国際ローター会長 フランチェスコ・アレツォ  
第 2640 地区ガバナー 北野 治義

[例会日] 毎週 月曜日 12:30~13:30  
[例会場] 和歌山市七番町 26-1 ダイワロイネットホテル和歌山 4F  
[事務局] 和歌山市広瀬通丁 3-13-2 コスモ広瀬 1F (〒640-8113)  
TEL 073-432-5260 / FAX 073-488-6665  
HP(URL)http://www.wkitarc.sakura.ne.jp  
E-mail : wnrcinfo@oak.ocn.ne.jp

よいことのために手を取りあおう

## 2025-26 年度 和歌山北 R C のテーマ

会 長 岡田 明久

『生きてる限り一所懸命』

会 長 : 岡田明久 友好クラブ  
幹 事 : 森本芳宣 水戸東 RC  
会報委員長 : 大橋二也

2 月ローターレート : 1 \$ = 154 円

☆ 平和構築と紛争予防月間 ☆

### プ ロ グ ラ ム

- ◇開会点鐘 18:30
- ◇R ソング 「われらの希い」  
ソング委員長 : 寺本尚弘君
- ◇ご来客紹介 親睦活動委員長 : 寺本尚弘君
- ◇出席報告 出席委員長 : 寺本尚弘君
- ◇会長・幹事・委員会・SAA 報告
- ◇夜間例会  
於 : 和韓食わらいや
- ◇閉会点鐘

----- 次回の例会 3 月 2 日 (月) -----

### 第 2021 回例会

- ☆卓話予定
- \* 3 月お誕生日お祝い : 福田会員・藤川会員
- \* 例会終了後「第 9 回定例理事役員会」開催

----- 前回の例会報告 2 月 9 日 (月) -----

### 第 2019 回例会

- 出席報告 (会員総数 20 名 免除 1 名)
- 出席会員 : 16 名 出席率 : 84%
- 1 月 26 日(月) Make up 後の出席率 : 84%

----- ビジター報告 寺本尚弘君 -----

合計 0 名

## ● 会長挨拶

岡田明久君



最近のお気に入りには、YouTube で川柳を見ることです。いくつかご紹介させていただきます。  
「朝起きて調子いいから医者に行く」  
「ベンツから乗り換えたのは車椅子」  
「つまづいて足元みれば何もなし」

「元酒豪今はシラフで千鳥足」  
「無病では話題に困る老人会」  
「来世でねめぐり逢ったらほっといて」  
「ただ傍にいるそれだけでうっとおしい」  
「私だけ伴侶がいると妻嘆く」

短い言葉でよくここまで表現でるなあと感心しました。小椋佳さんが、人間の最大の贅沢は、学びだと仰っています。82 歳になられた今でもフランス語、ピアノでの弾き語り、哲学を勉強されています。皆さんも学びの贅沢な遊びをしましょう。

## ● 幹事報告

森本芳宣君



### ◀ 回覧 ▶

- ・ガバナー月信 2 月号
- ・RLI 開催のご案内

### ◀ 報告 ▶

- ・本日、ローターリー・リーダーシップ研究会オンライン RLI 開催の案内を回覧しています。参加希望の方は、事務局まで

ご連絡下さい。参加申込書に記載して頂きたいので宜しく願います。また、パート 1 の参加締切が 2/24(火)となっているので、至急ご連絡下さい。

### ◀ その他 ▶

- ・次回の例会は、2/16(月)夜間例会 18:30~  
於 : 和韓食わらいや
- ・2/23(月祝)は、天皇誕生日振替休日 祝日休業
- ・次々回の例会は、3/2(月)ダイワロイネットホテル 4F 12:30~13:30 外部卓話予定
- \* 3 月お誕生日お祝い : 福田会員・藤川会員
- \* 例会終了後「第 9 回定例理事役員会」開催

四つのテスト (言行はこれに照らしてから)

I. 真実かどうか II. みんなに公平か

III. 好意と友情を深めるか IV. みんなのためになるかどうか

「平和構築と紛争予防月間にちなんで」  
国際奉仕委員会：委員長 和田耕司



① 2月は平和構築と紛争予防月間です。毎年2月に卓話を致しますが今年も宜しくお願い致します。と言う事で第二次世界大戦での日本敗戦から80年以上を経て、日本では戦争を経験したことのない世代が国民の大半を占めるようになりました。その間にも世界では紛争が起き、多くの国で軍事費が引き上げられる状況が続いています。そもそも戦争が起きると、自分の身に

何が起きるのか。世界の平和を希求する、ロータリーの会員として、かつて戦争を経験した仲間の会員たちの言葉に耳を傾け、それを記録し、後世に伝えてみてはいかがでしょうか。それでは、少年兵になったつもりで読みます。

「ある少年通信兵の沖縄戦」

② 僕は1929(昭和4)年4月25日に、具志川村(現・うるま市)平良川で生まれました。42年、13歳の時に沖縄県立第二中学校(現・沖縄県立那覇高等学校、以下・二中)に入学しました。沖縄戦があった44~45年当時の家族構成は、父母と姉1人、弟1人で、父はマリアナ諸島のサイパンに出征していました。戦争が始まったら、僕が卒業した具志川尋常小学校は具志川国民学校と名前を変えました。全てが軍事一色の時代でした。それでもまだ、二中入学当初は授業も正常に行われていたから良い時代でした。ただ、初めて見る軍事教練の授業、先輩たちが銃を手に隊列を組んで行進している光景には驚きました。2年生になると、日本軍の陣地構築に従事する勤労奉仕作業が多くなりました。3年生になる頃には学校生活の3分の2がそうした作業になっていました。1カ月くらい泊まり込みで飛行場の建設に動員されたこともあります。掘った防空壕はあまりに多くて、どこを掘ったかも覚えていません。労働は疲れましたが、当時は日本が外国に虐げられ、この戦争はやむにやまれぬもので、国の存亡に関わるものだと教えられましたし、皇国のため、天皇のため、自分をささげるという意識を持っていたから、働く喜びのような気持ちもありました。陸軍士官学校や海軍兵学校、予科練(海軍飛行予科練習生)に進む先輩もいて、在校生たちの憧れの目が注がれたものです。44年10月10日に行われる「十・十空襲」がありました。朝、僕は那覇港付近からのものすごい爆音を聞き、学校に走って行くと、同じように心配して駆け付けた教師や生徒が集まっていました。誰かが「消火に行こう」と言うと、すぐに話はまとまり、十数人の生徒が空襲の街へ駆け出しました。でも、一面が火の海で、少年たちの手ではどうしようもなく引き返すと、教師が生徒を防空壕に避難させているところでした。そこには付近の住民らも逃げ込んでいました。初めての空襲に、みんな不安な表情で時が過ぎ行くのを待ちました。防空壕から出ると二中の校舎が燃えていましたが、消火できるはずもなく、ただ燃え尽きるのを見ていました。その空襲で那覇市の80%ぐらいが焼失し、学校は二中記念館(志喜屋記念館)が形をとどめているだけ。周辺の緑もなく、面影をとどめないほどに痛めつけられていました。焼け跡にポツンと立つ記念館が、むしろ哀れさを増長するようで、がれきの山を前に、目には悔し涙があふれました。

以降、授業の3分の2ぐらいは陣地構築に動員されることになりました。その年の末頃、2年生と3年生が、半ば強制的に通信隊の入試試験を受けることになって、僕は親にも相談せず試験に臨みました。200人ぐらいが無線組、有線組、無線組の三つに分かれて採用され、僕は無線組になりました。その時、軍隊の1番下、金星一つだけの陸軍二等兵に任官されました。入隊先は第62師団通信隊で、30人ほどの二中学生がいました。入隊するには

親の許可が必要でしたが、母は当時、国防婦人会の会長をしていたので、反対するはずもないと思っていましたし、44年7月にサイパン日本軍守備隊が玉砕したと聞いていたから、アメリカ軍に対して父の仇討ちのような憎悪がありました。新しい軍服が支給され、僕ら3年生には銃も支給されました。僕は背の低い方で150cmにも満たなかったから、軍服はダブダブ、銃は重かった。翌45年の3月ぐらいまで、那覇市首里赤田町にあるキリスト教会で、無線の通信方法や機械について勉強することになりました。

肉体労働から解放され、食事也十分に出ましたが、モールス信号を早く打てるよう古参兵たちからの厳しい教育が続きました。やっとな古参兵の半分ほどの技量が身に付いたころ、沖縄戦が始まりました。4月に沖縄本島への艦砲射撃が始まって、5月になると那覇にも砲撃がありました。那覇沖のアメリカ軍の艦船は、船から船へ歩けるくらい近くと並んで、沖縄を取り巻いていました。砲撃がすごくて、もう1坪ごとに1発を撃ち込まれるような感じでした。僕らの技量では無線通信ができなかったから、少年兵は2人1組になって、ずっと発電機(テンバ)を手で回していました。テンバのハンドルを回すのは疲れる作業でした。他には炊事当番。炊事部から飯をもらって配達したり、飯ごうを洗ったりするのが主な仕事でした。壕(地下陣地)から100mほど離れたアンテナを結ぶ線が切れるこぼれがあって、それをつなぎに行く任務は、砲撃に遭う危険がありました。壕は高台にあったから、夕方、那覇港や中城湾を望むことができました。アメリカの艦船に突っ込む特攻機を何度か見ましたが、艦船から花火のように打ち出される何千、何万発もの砲撃で、ほとんどは途中で打ち落とされました。たまに「体当たり」に成功して、艦船から火柱が上がると、こちらの兵隊から「バンザイ」の歓声が上がりましたが、悲しさも込み上げてきました。4月20日ごろ、通信隊の壕に1人の少尉が逃げ込んできました。浦添方面から撤退してきた将校でしたが、丘の上にいる歩肖によると、少尉は白旗を掲げながらアメリカ軍機に追われ、逃げ回っていたそうです。そして壕に転がり込んできた途端に砲撃の開始。白旗の布地も、アメリカ軍のものなのか見たことがなく、尋問後にスパイとしてピストルで撃たれ、日本刀で首をはねられました。まだ敵とも交戦しないうちに、味方同士で殺し合いが始まったことが痛ましくて仕方ありませんでした。

③ 5月の末になると、那覇市の隣の首里から南部方面への撤退命令が出されました。小隊長は「これから島尻(沖縄本島南西部)の山城に撤退する。もし歩けるなら付いてこい。歩けなければ自決しなさい」と言って手榴弾一つ、靴下片方に米と乾パンを入れたものを、2袋くれました。僕ともう1人の負傷兵に、1人ずつ兵隊を付けてくれて、先発隊から遅れて、4人ずつ出発しました。沖縄の5月は梅雨で、ぬかるみで何度も転倒しました。雨と同じくらいに砲弾も降ってきて、見慣れた丘は地形が変わっていました。川を越えたと思ったらすぐに上り坂。僕はへたばって眠くてどうしようもない。もうどうでもよくなって、「自分を残して先に行ってください」と言うので、一緒にいた兵隊さんに「バカ!ここで死んでどうする」とビンタされ、近くの集落まで連れていってもらいました。乾パンも米も泥まみれでしたが、それをなめながら進みました。途中、一日橋という橋を渡っていくのだけど、敵はそこを狙って砲弾を打ち込む。もう死体が累々と転がっていました。その死体の間を腹ばいになって何とかくぐり抜けて、夜明けに陸軍病院にたどり着きましたが、そこも日本軍は撤退した後でした。でも、学徒看護婦が残っていて1泊させてもらい、おにぎりをもらいました。今でも、あのおにぎりの味は忘れられません。そこから先はアメリカ軍の、われわれがトンボと呼んでいた小型飛行機が上から監視していて、日本兵の姿があると機銃で撃ち込んでく

るので、昼間は行動が取れなくなりました。僕は目的地である本島南方の島尻には行ったこともなければある日、疲れと痛みもあり、今の糸満市の真壁近くをのろのろ歩いていると夜が明けてしまい、トンボが機銃で撃ってきました。一本道で逃げ場はなく、道端に転がっては伏せるを繰り返しました。もうどうしようもないから「みんな、動かんでおこう」とじっとしていたら、向こうはやっつけたと思ったのか、引き揚げていきました。今の「ひめゆりの塔」がある、真壁の壕にたどり着いて、そこで1泊しました。あの時はまだ避難者がいっぱい。女学生もいっぱいいました。僕たちはそこから本島中部、なかみ郡よみたに村の波平という所に向かいました。その頃には、日本軍が弱い住民に武器を向けることが多くなっていました。途中、民間人を追い出そうとする兵隊の姿も見ました。先発の部隊には、ようやく波平で合流できました。そこには壕はなく、分隊ごとに石を積んだりして、枯れ木などでカムフラージュして潜んでいました。波平はしばらく攻撃を受けず、戦争とは無縁と思えるほど静かでした。日中は何もやることがないから、傷口に湧いたうじ虫を見ていました。うじ虫はかゆいところもかいてくれるし、傷口も治療してくれます。うじ虫のおかげで腫れも引いて、歩けるようになっていました。しかし、そんな日々も長くは続かず、アメリカ軍の戦車隊が来ました。波平では、分隊ごとに隠れ場を作って避難していましたが、僕たちは遅れてきたから一番端っこに石を積み上げて、枯れ木を上置いて隠れていました。そこを南の糸満側から来たアメリカ軍の戦車隊に攻撃されました。二中生も含めて3分の2ぐらいが戦死。隠れ場が崩れて、そのまま生き埋めになった人もいました。井戸端に倒れた死体は頭の半分が吹っ飛ばされていて、その隣では同郷の親友、天願兼治君が息を引き取っていました。部隊は本来の目的地である、島尻の山城への撤退を余儀なくされました。山城の壕は陣地壕で、入り口は5カ所ありました。壕内には他の部隊や民間人がたくさんいて、壁側の戸板で作られた2段ベッドには、負傷者がうごめいていました。2~3日すると、そこにもアメリカ軍が来て、上から穴を掘って爆雷を入れてつぶそうとする。下からは戦車隊が砲撃してきて、それがやんだら、今度はボンベでガソリンがまかれる。それに火炎放射器で火がつけられる。壕の中は電気はおろか、ろうそくもないから真っ暗で右往左往するしかありません。壕内はガスが充満し、窒息した人が次々と倒れていきました。通路には死んだ人が重なっているから、踏みつけていくしかありません。中にはまだ息のある人がいて、「誰だ！踏みつけたのは！」と怒鳴る声が聞こえました。手榴弾を抱いて自決する人がいる一方で、手榴弾をたたいたものの、どうしても自決し切れなくて、生きている人たちの方に投げつけてしまう人がいます。あちこちで叫び声が上がって、本当に地獄のようでした。夜になって外にはい出ていくと、中隊長が来て「皇国が負けることはない。1人でも多く斬り込みに参加し、思い思いの場所で名誉ある最期を遂げるように」と訓示し、部隊の解散を告げました。それで僕と1期後輩の上原君は、前を歩く兵隊を追っていくことにしました。そうしたら、その人が日本刀を抜いて「付いてきたら、ぶった斬るぞ」と言うので、びっくりして反対方向に逃げました。すると、同級生を含むグループが敵陣に斬り込みに行く相談をしていました。僕らも合流して移動を始めたもの、照明弾が次々と上がって明るいから立つこともできず、腹ばいで進むしかありません。そのうち、夜が明けてしまい、仕秀なく、枯れたキビ畑に体を隠しました。疲労困憊のため、僕が思わず眠りに落ちていた間に、上原君がアメリカ兵の死体のかばんから缶詰みたいな物を拾ってきました。僕たちはしばらく何も食べていなかったから「これが缶詰か弾薬か分からないけど、弾薬なら自決、缶詰ならもうけものだ」と言って開けまし

た。するといい匂いがして、2人で交互に食べました。今になって思うと、あれはコンビーフの缶詰でした。夢中になって食べていたら、知らず知らずのうちに、僕たちはアメリカ兵に囲まれていました。僕と同様、グループの兵隊たちは眠りに落ちていました。その中の1人が囲まれたことに気づき、銃を構えた途端、乱射が始まりました。日本兵が1発ずつしか撃てないのに、向こうは自動小銃でババババと撃ってくる。乱射も悲鳴も、ごく短い時間でやみました。アメリカ兵たちが畑に踏み込んできて、うめき声を上げている僕らのグループの兵隊たちにとどめを刺していききました。そんな中、同級生の2人が畑の中でバンザイの格好をしました。もう瞬間的な判断で、「僕たちもやろう」と、上原君と2人で手を上げたら、アメリカ兵が「前に出ろ」と合図しました。僕はとっさに「アイキャンノットスピークイングリッシュ」と叫びました。あの頃は外国語を勉強させてもらえなかったから、それが精いっぱいでした。それをきっかけに僕に話しかけてくれるけれど、言葉の意味が分かりません。黙っていたら、頭を押さえ付けられ、もうこれまでだと覚悟しました。その時、山城寛則という同級生が「スクールボーイ、スクールボーイ」と叫びました。そうしたら、今度はアメリカ兵が彼と話し始めました。横で話を聞いているうちに、何人が隠れていたかを聞いているだろうと思えてきて、僕は英語の数字は10までしか知らなかったので、14は分からなくて「テン、フォー」と言って、足で14という字を書きました。それでようやく納得してくれて、僕らは捕虜になりました。結局、あの場で助かったのは僕ら4人だけ。アメリカ兵が血だらけになった銃や刀を握り引き揚げていく姿を見て、僕は思わず目を背けました。やがてトラックに乗せられ収容所に向かいました。アメリカ兵がチョコレートくれたけど、毒が入っていると思って食べずにいると、沖縄出身の日系二世という人が来て、「お菓子だよ」って食べてみせてくれたから、そこでようやく食べることができました。途中の道端には死体が積み上げられていました。あの頃は「捕虜になるくらいなら自決しなさい」と言われていたので、捕虜になってしまったことが恥ずかしい、亡くなった人たちに申し訳ないという気持ちでした。豊見城にあった伊良波収容所に着くと、たくさんの捕虜がいました。上官だった将校2人も何食わぬ顔で座っていて、そのうちの1人は刀を抜き、僕たちを追っ払ったと思える将校で、無性に腹が立ちました。そこから嘉手納飛行場の近くの収容所に連れていかれ、2~3日後に国頭郡の屋嘉捕虜収容所へ。その頃には恥ずかしいという気持ちは薄れていたように思います。

④さらに1週間ぐらいしたら広場に集められ、大型トラックに乗せられました。僕は捕虜が多過ぎるから殺されるんだと思いました。だから、屋嘉捕虜収容所から移送される途中、誰かが拾って家族へ届けてほしい、僕の形見になればいいと願いながら、自分の名前を書いた帽子を車から外に投げました。嘉手納近くの海岸に着くと、船が停泊していました。その時にも僕は、陸上でたくさん人間を処刑すると後が大変だから、殺して海に捨てるんだと思っていました。その後、さらに大きい船に移るようになりました。船から網のはしごが降ろされ、大人の兵隊は元気よく登れるけれど、僕は足を負傷している上に、背が低い、怖いから最後までかかってしまいました。乗船後すぐにシャワーで体を洗い、殺虫剤の粉を浴びせられました。だぶだぶのシャツとパンツが渡され、続いてスプーンとお椀が渡されました。その時になってようやく「これは殺すんじゃないんだな」と思いました。数日して、船はハワイに向かっているとささやかれるようになりました。2週間ぐらいしたらハワイのオアフ島に着いて、大型トラックで山の奥に連れていかれました。赤土に囲まれた収容所があって、そこにイタリア人

の捕虜のグループがいて、われわれが到着したのを見て、「バンザイ、バンザイ」と笑顔を見せてくる。われわれは言葉も分からないけど、「バンザイ、バンザイ」と返すと、向こうも「ジャパンバンザイ」と返してくる。この収容所を僕はアカンチャー（赤土）収容所と呼びました。身長が150cmにも満たなかった僕と上原君は「ショウリー（チビ）」と呼ばれ、かわいがられました。アカンチャー収容所の後、ホノウリウリ収容所に移りました。そこで約3カ月暮らした後、生死の境を共に行動した上原君と別れなければならなくなりました。戦争は既に日本の敗戦で終結しており、「少年」と「フィリア組（沖縄の風土病とされた感染症）」が先に、沖縄に帰されることになったのです。一方、僕は足に食い込んだ弾片の摘出手術で海軍病院に入院することになり、帰国の機会を逃してしまいました。僕は退院して間もなく、オアフ島サンド・アイランドの収容所に移されました。食事は質、量とも落ち、砂地に4人用テント、折り畳み式の野戦用ベッドを並べて眠りました。毛布1枚では寒く、その毛布やベッドを濡らすわけにはいかないので、雨の日はとても困りました。強制労働も始まりました。飛行場や兵舎周辺の草刈り、洗濯工場、食堂の皿洗いもありました。びっくりしたのは、水洗便所でした。椅子型の便器も初めて見ましたし、座って下に垂れ流していく仕組みにも驚きました。収容所での娯楽として、沖縄芝居をみんなで行いました。玄人がいて演技を指導し、かつらなど必要な道具は自分たちで作りました。素人の演技でしたが、捕虜たちには大好評で、喜怒哀楽をあらわにしていました。それを、金網の外から、涙を流しながら眺めている人たちがいました。ハワイの日系1世、2世たちです。捕虜の中には、親戚の2世から、おにぎりや万年筆、時計をもらってくる人もいました。その収容所で、僕は思いがけず、母の健在を知りました。それは屋嘉捕虜収容所からハワイに送られる途中で、家族への形見にとトラックから投げた名前入りの帽子が、母の元に届いたことがきっかけでした。母の手紙がアメリカ兵からアメリカへ。そしてハワイの2世の手を経て、僕に届けられたのです。家族はみんな死んでしまったかもしれない、という思いがあったから、母が生きていると分かってからはもう、悩みとか苦労とか不安というのが一掃されて、安心感から、収容所での後半はむしろ遊びながら暮らしたような気持ちでした。

僕が帰還したのは1946（昭和21）年11月です。ハワイに送られた時、くるぶしにかかっていたズボンの裾は、15cmも上がっていました。収容所で、栄養のあるものを食べさせてもらったおかげです。帰国した時、母でさえ、集団の中の僕を探し出すことができなかったほどでした。帰る直前、「諸見里という人」を探しているハワイの日系1世がいると聞いて面会に行きました。矢継ぎ早の質問に答えていると、遠い親戚だと言います。その人が帰り際に、腕にはめていた時計をプレゼントしてくれました。全く思いも寄らない、遠い親戚からの心温まるプレゼントでした。その時計はネジを巻くと、今でも時を刻み、若い頃の思い出が走馬灯のようによみがえってきます。

⑤最後に皇国のため、本土防衛のためと参戦し、老人や女性や子どもたちまで巻き込まれ、敗戦の結果、沖縄戦だけで約20万人が犠牲になりました。第二中学校の職員、生徒からは約260人が従軍し、その80%近くが帰らぬ人となりました。あれから80年もの歳月が流れ、人々は豊かさに慣れ、戦争体験も風化しつつありますが、悲惨極まりない戦禍をくぐり抜けて来た者として、これからも平和のありがたさ、生命の尊さを後世に伝えていかなければならないと思いつけています。たとえ、どのような大義名分があろうとも、二度とあのような忌まわしい戦場に、かけがえのない子や孫たちを送り込むことのないよう、反戦の心を後世に伝えてほしい。戦争は、簡単に始めることができます。そして、戦争というのは、人だけが止めることができます。皆さん、特に若い人たちは戦争に加担しないよう、

あくまでも民主的に、争いのない世の中をつくってほしい、それが何百万人もの戦争の犠牲者に対する、われわれ日本国民の義務じゃないかと思えます。必ず、平和な世の中をつくってくれることを希望します。以上です、長々とお清聴ありがとうございました。

## 🍰 2月お誕生日お祝い 🍰



2月12日 田邊昌也君

2月23日 渡邊孝富君

🎉 お誕生日おめでとうございます 🎉

## ◆ R 財団特別寄付認証品(PHF1)襟ピンの贈呈 ◆



認証品授与者：岡田明久会長

表彰者発表：R 財団委員会 森本芳宣委員長

表彰者：重根康志君

## ♥ ニコニコ箱 ¥47,000 ♥

- ・ニコニコ箱募金。 岡田明久君 森本芳宣君 藤川みなみさん
- ・皆さん、寒い中ありがとうございます。 岡田明久君
- ・ニコニコ箱募金。 森本芳宣君
- ・ニコニコ箱募金。 明楽修身君
- ・ニコニコ箱募金。 榎谷知樹君
- ・ニコニコ箱募金。 山下茂男君
- ・月間にちなんでの卓話します。宜しくお願ひします。 和田耕司君
- ・ニコニコ箱募金。 重根康志君
- ・ニコニコ箱募金。 寺本尚弘君
- ・ニコニコ箱募金。 中村博道君
- ・ニコニコ箱募金。 キム スクヒさん
- ・ニコニコ箱募金。 大橋二也君
- ・ニコニコ箱募金。 森 勇樹君
- ・ニコニコ箱募金。 土橋基樹君
- ・誕生日お祝ひ。 田邊昌也君 渡邊孝富君
- ・妻誕生日。 山下茂男君

😊 ニコニコ箱累計 ¥943,600 😊

第1回アルコール募金 ¥18,000

第2回アルコール募金 ¥13,900

第3回アルコール募金 ¥18,000

アルコール募金総合計 ¥49,900

～ご協力頂きありがとうございました～